

## 教師兼協力者・佐藤ミツとは何者か（2）

### はじめに

仙台で開拓伝道を行い、日本バプテスト仙台基督教会設立に貢献したのは、W.C.グラント宣教師夫妻でした。そしてそのお二人の「教師兼協力者」として、働きを助け支えた女性が佐藤ミツ<sup>1</sup>です。彼女についてグラント師は著書の中で、「キリストに忠実に従う者」<sup>2</sup>と評していますが、私たちはこれまで彼女の人物像にあまり注目することがありませんでした。もちろん仙台教会の初期のメンバーたちは、彼女の人となりをよくご存じだったのでしょうが、時の流れの中でいつしか忘れられた存在となっていました。

前号では、主に尚綱学院同窓会の機関誌『むつみのくさり』から、ミツの人となりの片鱗を発掘しました。その後、日本基督教団仙台北三番丁教会発行の『北三群像』<sup>3</sup>や逝去会員名簿（抜粋）などが入手できたことにより、ミツの人物像の輪郭がある程度明確になってきました。

### 1. 遠野に生まれる

佐藤ミツ（旧姓相墨・アイズミ）は1897年（明治30）1月1日に、岩手県遠野町に生まれました。その当時の遠野は「何処を向いても山又山で、何もない文化おくれた町、ランプの生活だった」<sup>4</sup>とのことでした。

この町に初めてキリストの光がもたらされたのは、ミツが生まれる5年ほど前のことでした。当時神学生だった中島力三郎<sup>5</sup>たちは1892年（明治25）の初夏、遠野に赴き開拓伝道を行い、その活動結果をもとに、この地が有望な伝道地であることを仙台在住のアメリカン・バプテストの宣教師S.W.ハンブレンに進言します。当時、ハンブレン宣教師が岩手地区の宣教の責任者でもあったからです。同師はさっそく実地調査を行い、盛岡教会（現在の日本基督教団内丸教会）の牧師が毎月巡回伝道のため遠野に赴く手はずを整えました。1893年（明治26）のことです<sup>6</sup>。

ミツが小学生の頃は、神学生の佐藤卯右衛門がコンニャク屋の二階を会場に教会学校を開き、賛美歌を教え、子どもたちに聖書のお話をしていました。生徒はミツを含め大体は3名です。ミツはほとんど休むことなく教会学校に出席しましたが、歌を歌い珍しい話を聞くことは、彼女にとっては大きな楽しみだったのです<sup>7</sup>。

なお、ミツの母親は熱心なクリスチャンでした。どのような経緯でクリスチャンになったのかなどは不明ですが、遠野教会の会員として信仰生活を送った方です。尚綱女学校の校長を退任したブゼル宣教師が、遠野教会に赴任し熱心に活動しますが、遠野時代のブゼルの日記<sup>8</sup>には、しばしばミツの母親（アイズミ）が登場しています。

## 2. 尚綱女学校に学ぶ

ミツが仙台の尚綱女学校に進学するきっかけは、教会学校に出席していた中で与えられたのかもしれませんが。また、母親が既に信者になっていたか、あるいはまだ信仰に入っていないかとも、恐らくキリスト教にシンパシーを感じていた人物で、そのことが大いに影響したとも考えられます。相墨家が経済的にはある程度余裕のある家柄で、娘を県外の学校に送り出すことができたのだと推測することも可能です。私たちの目にはいくつかの偶然の積み重ねのように見えますが、ミツの歩むべき人生の道筋を、主はご計画に従って周到に準備してくださっていたのです。

ミツは1911年（明治44）に尚綱女学校本科に入学します。この年、ブゼル宣教師は休暇帰国中でしたので、別の宣教師が校長を務めていましたが、翌年からは帰国したブゼルが校長に復帰しています。尚綱女学校本科は修業年数5年で、全員が寄宿舎生活を行うよう定められていました。また、寄宿舎内則第11には「日曜日は靈性のかん養を主とすべき日なりとす」<sup>9</sup>とあり、日曜日は他派の教会に出席する若干の生徒を除いて、寄宿舎生全員が北一番丁の仙台浸礼基督教会（現在の日本基督教団仙台ホサナ教会）に出席することになっていました。そのころ仙台には、バプテスト派の教会はそこしかなかったのです。

そして2年後の1913年（大正2）に、ミツはこの教会でバプテスマを受けます。遠野時代、教会学校に喜んで通う中、ミツの心には信仰の種がまかれ、尚綱女学校での生活を通し、その種から芽が生え出で真っすぐに成長し、やがて実を結んだのです。

## 3. 卒業後の歩み

1916年（大正5）、ミツは本科を卒業しますが、学校生活の中でミツと接してきた宣教師たちは、彼女の中に確かな信仰と、誠実で信頼できる人柄と、良き働き人となる大きな可能性を強く感じ取っていました。卒業後、一旦は故郷に帰り家事手伝いに励んでいたミツですが、ブゼル宣教師の勧めで仙台の青葉女学院保母養成部<sup>10</sup>に学び、修了後、開設したばかりの附属尚綱幼稚園で働きます。また、ジェッシー宣教師からの求めに応じ、利府や岩切や高城での教会学校のお手伝いを週一回行うようになります。ミツは卒業後のこれらの期間も、寄宿舎で生活することを学校から特別に許されていました<sup>11</sup>。また、誰からかは不明ですが尚綱で働くことを強く勧められ、教員になるべく日本女子大学国文学部に入学し、卒業後、実際に尚綱女学校の国語科教師として勤務しました<sup>12</sup>。1923年（大正12）のことです。翌年佐藤三郎と結婚<sup>13</sup>しますが、1925年（大正14）に三郎が満州に転勤となったため、ミツは尚綱を退職せざるを得ませんでした。

ミツと三郎との出会いは、実は遠野時代に遡ります。三郎は岩手県江刺郡梁川村の出身で、中学は遠野中学校でした。中学校に通う中でキリスト教に出会い、1910年（明治43）に遠野教会で受浸します。15才の時でした。当然のことですが、礼拝や教会学校で2才年下のミツとも顔見知りだったはずで

また、ミツが尚綱女学校で学んでいた時期は、三郎が東北学院専門部英文科、そして神学科で学んでいた時期と重なりますので、日曜日には仙台浸礼基督教会で礼拝を共にしていたことでしょう。少年少女時代そして青年時代、二人は教会という場で信仰の絆によって強く結ばれていたのです。1919年（大正8）に、三郎は東洋拓殖株式会社<sup>14</sup>に入社し東京本社勤務になります。ミツが日本女子大に入学し東京での生活を始めたのも似通った時期です。遠野や仙台を離れ、見知らぬ町・東京で過ごす中、二人が生活と信仰を互いに励ましあい、絆をさらに深め合うようになるのは自然なことです。やがて二人の間に愛が芽生えることになって不思議ではありません。

#### 4. 満州での生活と引き上げ後の生活

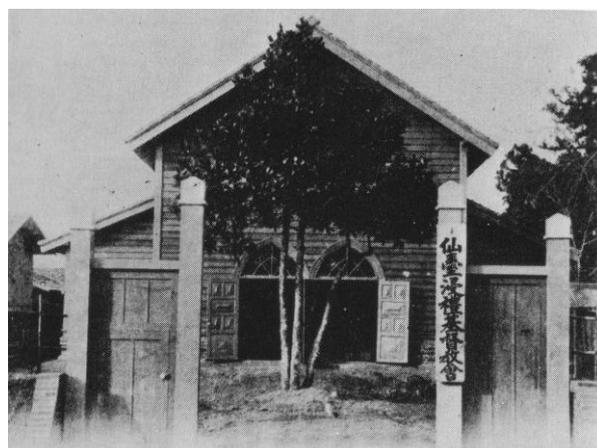
三郎とミツ夫妻は1925年（大正14）に満州の奉天に渡り、敗戦翌年に日本に引き揚げてくるまでの21年間、かの地で生活を送りました。初めの何年間かは、ミツは家事と育児に追われる毎日だったでしょう。その間1928年（昭和3）には、故郷の父（2月）と盛岡に嫁いだ妹梅子（5月）<sup>15</sup>を相次いで亡くすという、悲しみの出来事を経験します。

奉天での生活にも落ち着きが出てきたころ、ミツはスコットランド合同長老教会の伝道医師が設立した奉天医科専門学校で、日本語教師として働くことになります。その働きは1932年（昭和7）から1945年（昭和20）まで続くのですが、1942年（昭和17）からは、夫三郎もこの学校（奉天盛京医科大学と改称）の幹事として勤務することになります。これまでの会社を退職し新たにこの職に就いたのか、あるいは会社の業務の一環としてこの職務に就いたのかは定かではありません。いずれにせよ二人は、この学校で働く中で敗戦の日を迎えることになりました。

着の身着のまま満州から引き揚げてきた一家4人は、三郎のふるさと梁川村に一旦戻ります。この家族のその後の足取りについては、断片的なことしかわかりません。三郎は長崎YMCAに2年ほど勤務した後、1949年（昭和24）から61才で亡くなるまで尚綱学院の中高部、及び同短大に勤務していたこと<sup>16</sup>。ミツは1948年（昭和23）に息子の看病のため仙台での生活が始まったこと。三郎は遠野教会から、ミツは仙台北一番丁教会（旧仙台浸礼基督教会・現仙台ホサナ教会）から、仙台北三番丁教会に転会し<sup>17</sup>、それぞれ教会役員や教会学校教師として熱心に奉仕したことなどです<sup>18</sup>。またミツは尚綱学院評議員として、さらに同窓会や後援会の役員としても長年にわたり職責を果たしておられました<sup>19</sup>。

以上のように仙台北三番丁教会や尚綱学院との関わりの中で、責任ある役割を果たしていた人生の充実期（50才代中頃）に、佐藤ミツはグラント宣教師夫妻の「教師兼協力者」として重要な働きを担ってくださり、私たちの教会と幼稚園の初期の働きをしっかりと支え、助けてくださったのです<sup>20</sup>。衷心より感謝。

（文責：小林孝男）



仙台浸礼基督教会（北一番丁）

---

<sup>1</sup> 「ミツ」という名前の表記は、資料によって「みつ」であったり「光子」であったりする。

<sup>2</sup> 『主の息吹の中で』91 頁

<sup>3</sup> 仙台北三番丁教会の創立九十周年記念文集として、2016 年 11 月に発行されたもの。「すでに召された信仰の先輩方を記念し、また現在の教会員を記録するために」編集・出版された。

<sup>4</sup> 『北三群像』90 頁

<sup>5</sup> 仙台浸礼教会出身で、横浜バプテスト神学校卒業後、盛岡浸礼教会の伝道師となり、後に仙台浸礼教会の牧師となる。『尚綱女学院 100 年史』63 頁

<sup>6</sup> 『バプテストの東北伝道』103 頁、『日本バプテスト史年表』31 頁

<sup>7</sup> 『北三群像』90 頁、『バプテストの東北伝道』104 頁

<sup>8</sup> 佐々木公明『遠野での「物語」 ブゼル先生最終章』(2019)

<sup>9</sup> 『尚綱女学院七十年史』103 頁

<sup>10</sup> 日本聖公会の婦人伝道師養成の目的で、1899 年(明治 32)に仙台に設立される。1913 年(大正 2)に『青葉女学院』と改称し保母養成部を併設。その教育目的は、『幼稚園保母及び将来児童を指導すべき者を養成するをもって目的となし更に幼稚園伝道事業のために特に訓練をなすものとす』とある。1941 年(昭和 16)に廃校

<sup>11</sup> 『むつみのくさり』11 号、17 頁

<sup>12</sup> 『尚綱女学院七十年史』473 頁

<sup>13</sup> 逝去会員名簿の記載によれば、ミツの結婚は 1924 年(大正 13)夏である。ミツは尚綱に勤務し、三郎は東京勤務の時期である。結婚してすぐ別々の町に住んだことになるが、このあたりの事実関係は今のところはっきりしていない。

<sup>14</sup> 日本の朝鮮統治時代に、朝鮮における拓殖資金の供給および拓殖事業を目的とした半官半民の特殊事業会社。日本政府の植民地政策に協力しながら、拓殖事業に必要な資金の融資、水利事業、土地取得および土地の経営管理、移民の募集および移民のための建物の建造販売など広範囲にわたる事業を行なった。1908 年東洋拓殖株式会社法に基づき日本、朝鮮両国からの出資によって京城に設立されたが、1910 年の日韓併合以後は資本金を増額していくとともに、株主は日本人に限られることになり、1917 年本社も東京に移された。その間に朝鮮電力、朝鮮鉄道、東拓鉱業、鮮満拓殖、東洋畜産など 52 社の経営に参加、また満州、モンゴル、中国、フィリピン、南洋諸島、マレー半島にまで事業地域を広げ、38 年間朝鮮経済を支配した。第 2 次世界大戦の終結とともに解体

<sup>15</sup> 『むつみのくさり』16 号 127 頁、『遠野での「物語」ブゼル先生最終章』77 頁、86 頁

<sup>16</sup> 「仙台北三番丁教会逝去会員名簿」

<sup>17</sup> 同上

<sup>18</sup> 『日本基督教団仙台北三番丁教会八十年史』372~377 頁

<sup>19</sup> 『尚綱女学院七十年史』357~359 頁、426~433 頁

<sup>20</sup> ミツの人物像を紐解く資料を入手できたのは、お二人のご高齢の尚綱学院の同窓生のおかげだった。お二人が昔の尚綱時代のお話をする中で、佐藤三郎先生に尚綱で英語を教わったことや、三郎先生が仙台北三番丁教会の会員であったことなどを思い出していただき、その情報を得た私は、すぐに仙台北三番丁教会の牧師(2023 年 3 月退任)で、尚綱学院院長(2023 年 1 月就任)を兼務されていた佐藤司郎先生にお問い合わせをしたところ、佐藤三郎・ミツ夫妻に関する貴重な資料をさっそくご提供くださった。それによってミツの人物像の輪郭がかなり見えてきた次第である。

一人ひとりの人生には独自の歴史がある。その歴史は伝承されなければ、いつかは忘れ去られ、無かったも同然になってしまう。一人の人生の歴史を語り継ぐ資料は、何らかの形で必ず残されている。ただどこに残されているのか、どのような形で残されているのか、誰がその所在を知っているのかなど、なかなか分からないことが多い。求め続けることや探し続けることこそが大切だが、同時に人と人とのネットワークや、人生の先輩たちのたわいない思い出話の中に、発見の貴重な糸口が隠されていたりする。今回、そのことを強く実感させられた。ご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げたい。